

## 著者紹介

---

**羅 芝賢** (ナ ジヒョン)

担当：序章，第Ⅰ部，第Ⅱ部

現職：國學院大學法学部准教授

略歴：1984年韓国大邱に生まれる。2008年高麗大学文学部卒業。2017年東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士（法学）。東京大学公共政策大学院特任講師などを経て現職。

主著：『番号を創る権力——日本における番号制度の成立と展開』（東京大学出版会，2019年，藤田賞奨励賞受賞）

### /// 読者へのメッセージ ///

政治学に親しみを感じるための方法を1つご紹介します。政治ニュースを見ながら、「ジョン・ロックさんならどう思うかな」「カール・マルクスさんなら何をいうかな」と思考をめぐらせてみるのです。もちろん、ロックやマルクスの著作を先に読まなければなりません。

**前田 健太郎** (まえだ けんたろう)

担当：第Ⅲ部，終章

現職：東京大学大学院法学政治学研究科教授

略歴：1980年東京に生まれる。2003年東京大学文学部卒業。2011年東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士（法学）。首都大学東京大学院社会科学研究所准教授などを経て現職。

主著：『市民を雇わない国家——日本が公務員の少ない国へと至った道』（東京大学出版会，2014年，サントリー学芸賞受賞），『女性のいない民主主義』（岩波書店，2019年）

### /// 読者へのメッセージ ///

昔から，1人で考えている時よりも，他人と話している時のほうが，うまく考えがまとまります。この教科書も，2人の著者で議論しながら書きました。実は，歴史上の政治思想家の多くも，無類のおしゃべり好きだったそうです。もしかすると，それが政治の本質なのかもしれませんね。

# 目 次

序章	1
----	---

政治学の面白さ (2) 「権力を読み解く」とは? (3) 本書の構成 (5)

## 第 I 部 基本的な考え方

第 1 章 政治権力と暴力	11
---------------	----

1 暴力は減少したのか	13
-------------	----

武士の世と現代社会 (13) 暴力の隠蔽 (14) 「文明化」の帰結 (16) 監獄の誕生 (17) 近代の魔女狩り (18) 構造的暴力と「解  
釈労働」 (19)

2 政治と権力	21
---------	----

権力を伴う活動としての政治 (21) 権力と暴力の区別 (22) いたるところにある政治 (24) 多元主義の盲点 (25)

3 隠蔽する権力	26
----------	----

権力の3つの次元 (26) 三次元的権力観の限界 (27) フェミニズムからの問題提起 (28) 経済政策が隠すもの (29) 多数決と国家の暴力 (30)

第 2 章 国 家	35
-----------	----

1 政治共同体か、暴力機構か	37
----------------	----

政治共同体としての国家 (37) 国家が作る市民 (38) 暴力機構としての国家 (39) 税と穀物と文字 (41) 資本家の国家 (43) 国家の自律性 (44)

<b>2 正統な支配</b> .....	46
暴力団と国家 (46) 権威にもとづく正統な支配 (47) 伝統的支配 (48) カリスマの支配 (49) 合法的支配 (50)	
<b>3 近代国家への変貌</b> .....	51
近代国家の形式的特徴 (51) 自律性の低下と能力の拡大 (54) 近代国家を生成した4つの権力 (56)	

## 第 II 部 国民国家の成立 なぜ世界は1つになれないのか

---

<b>第3章 国民を創る思想</b> .....	63
<b>1 ナショナリズムとは何か</b> .....	65
国家権力を生み出す思想 (65) 想像の政治共同体 (66) ナショナリズムをどう説明するか (68)	
<b>2 宗教共同体の隙間から誕生した国民共同体</b> .....	69
文化を共有する範囲 (69) 宗教と資本主義 (70) 国家の領域性の強化 (72) 出版資本主義 (73) 植民地で生まれたナショナリズム (74)	
<b>3 日本の近代と天皇制</b> .....	77
ヨーロッパと東アジアの違い (77) 文明国と宗教 (79) 政体と国体の相剋 (80) 象徴天皇制 (81)	
<b>4 近代国家と家父長制</b> .....	83
家父長制と戦争 (83) 近代家父長制の良妻賢母主義 (84) 女の解放を目指して (86)	

第 4 章	国民経済の成立	91
1	資本主義と政治権力	93
	自由主義と国家 (93) マルクス主義と階級対立 (94) 資本主義のグローバル化 (97)	
2	資本主義に対する反動	99
	自由放任と自己調整的市場 (99) 商品擬制と二重の運動 (100) ファシズム体制の成立 (103) 社会民主主義 (104) 日本における「二重の運動」(105) 繰り返される「二重の運動」(106)	
3	国民経済とグローバル経済	108
	資本主義とナショナリズム (108) 資本主義と公共圏 (109) 国民経済と民主主義 (110) 階層化されたグローバル経済 (112) グローバル化の限界 (113)	
第 5 章	軍事力と国家の拡大	119
1	軍事力から生まれた政治	121
	戦士たちの民主主義 (121) 「軍事革命」とヨーロッパの近代国家 (123) 一元化へと向かう東アジア (125) 主権国家体制と朝貢一元体制の衝突 (126)	
2	近代の戦争と国家	128
	戦争と革命 (128) 永続的な戦争国家 (130) 総力戦と福祉国家 (131) 冷戦と開発主義国家 (133)	
3	軍事力と安全保障	134
	リアリズムと国際政治 (134) 人間の本性 (135) 国際システムのアナキー (136) 覇権安定論 (138) 国境を越えて共有される規範 (140)	
第 6 章	制度と国家の安定	147

<b>1 近代官僚制という制度</b> .....	149
制度は何のためにあるか (149) 革命を不可能にするもの (150) 近代官僚制の特徴 (151) 制度が生み出す多様性 (152) 制度の経 路依存性 (153)	
<b>2 制度としての民主主義</b> .....	154
民主主義とは何か (154) 現代の民主主義 (156) ポリアーキー (158) ポリアーキーの経路依存性 (164)	
<b>3 民主主義の効果</b> .....	165
民主的な制度の効率性 (165) 民主主義と経済的平等 (166) 民主 主義と平和 (167) 殺し合わないようにする体制 (168) 民主主義の 危機? (169) ポピュリズムとどう向き合うか (170)	

### 第 III 部 国民国家の民主主義 その理想と現実

<b>第 7 章 民主主義の多様性</b> .....	177
<b>1 議院内閣制と大統領制</b> .....	179
制度の背後にある権力 (179) 権力融合と権力分立 (180) エリー トによる制度の選択 (182) 権力分立制と近代日本 (183) 日本の議 院内閣制への道 (184) 多様な議院内閣制と大統領制 (186)	
<b>2 多数決型と合意型</b> .....	187
2つの「人民による支配」(187) 合意型民主主義の意義 (191) 政 治エリートと合意型民主主義 (192)	
<b>3 日本の政治制度</b> .....	194
どの政治制度に注目するか (194) 制度改革の分裂 (195) 日本の 政治制度は合意型か (196) 日本政治への新たな異議申し立て (198) 「理念の政治」から「存在の政治」へ (199)	

第 8 章 市民とは誰か ..... 203

1 民主主義と市民権 ..... 205

身分から市民へ (205) 国民国家と市民権 (207) 市民権の起源 (207) 政治的市民権から社会的市民権へ (209)

2 社会的市民権をめぐる対立 ..... 212

脱商品化と階層化 (212) 普遍主義と特殊主義 (213) フェミニスト福祉国家論 (214) 人種・民族と福祉国家 (218)

3 外国人の権利 ..... 219

国民と外国人の境界 (219) 外国人の参政権 (221) 外国人と福祉国家 (222) 多文化主義と同化主義 (223) 外国人の特権 (224)

第 9 章 メディアと世論 ..... 229

1 マスメディアと政治権力 ..... 231

第四の権力 (231) 権力の監視か、権力への追従か (233) メディア多元主義 (234) マスメディアの中立性 (236) 政治エリートのメディア戦略 (237)

2 マスメディアと世論 ..... 239

世論は操作されているのか (239) マスメディア報道の影響力 (240) 世論と熟議 (243) 討論型世論調査 (244)

3 インターネットと公共圏 ..... 245

インターネットと政治権力 (245) 世論の両極化 (247) プラットフォームの権力 (249) インターネットの民主化 (250)

第 10 章 集団と政治 ..... 255

1 利益集団政治の構造 ..... 257

集団による政治 (257) 民主主義と市民社会 (258) ソーシャル・キャピタル (259) エリート主義と多元主義 (262) 多元主義と集合

	行為論 (263) 利益集団と社会運動 (264)	
<b>2</b>	<b>労働運動の盛衰</b> .....	265
	コーポラティズムと多元主義 (265) コーポラティズムの起源 (266)	
	経済危機とネオ=コーポラティズム (268) 戦後日本の労働政治	
	(269) 労働運動の体制化 (271)	
<b>3</b>	<b>国家権力と社会運動</b> .....	272
	社会運動の多様化 (272) 政治的機会構造の重要性 (273) 反動と	
	しての社会運動 (274) 社会運動と国際政治 (276) プーメラン・モ	
	デル (277)	
<b>第 11 章</b>	<b>選挙の戦略</b> .....	281
<b>1</b>	<b>選挙という制度</b> .....	283
	誰も立候補しない選挙 (283) 選挙は公約で決まるか (284) 有権	
	者への働きかけ (287) 秘密投票制 (288) 選挙戦略の立案 (289)	
<b>2</b>	<b>支持者の確保</b> .....	291
	有権者の投票行動 (291) 組織票 (292) 候補者の支持基盤 (294)	
	浮動票とイメージ戦略 (295) 選挙と政策の操作 (296)	
<b>3</b>	<b>支持者の動員</b> .....	297
	政治参加の意味 (297) 社会経済的地位 (SES) モデル (299) 動	
	員の機能 (300) 日本における選挙と動員 (301) 動員のための選	
	挙戦略 (302)	
<b>第 12 章</b>	<b>政党と政党システム</b> .....	307
<b>1</b>	<b>政党という組織</b> .....	309
	寡頭制の鉄則 (309) 政党組織の発展 (311) 政党システム (312)	
	戦前日本の二大政党制 (314)	
<b>2</b>	<b>選挙制度の改革</b> .....	316
	小選挙区制とデュヴェルジエの法則 (316) 社会的亀裂と比例代表制	

(317) 中選挙区制と戦後日本の政党システム (318) 自民党と中選挙区制 (321) 選挙制度改革と二大政党制の挫折 (323) 選挙制度改革と政党組織 (323)

**3 少数派とクオータ制** ..... 326

既成政党への不満 (326) 比例代表制からクオータ制へ (327) ジェンダー・クオータの拡大 (328) クオータ制の未来 (330)

**第13章 政策決定** ..... 335

**1 空洞化した国会** ..... 337

立法を行うのは誰か (337) 内閣による立法 (338) 本会議での法案審議の欠如 (340) 官僚が作る内閣提出法案 (341) 野党の抵抗 (342) 議員立法の可能性 (343)

**2 官僚主導と政治主導** ..... 345

日本官僚制の政策形成過程 (345) 官僚主導 (347) 政党優位論 (348) セクショナリズム (350) 政治主導 (351) 政治の行政化 (353)

**3 地方自治と市民参加** ..... 354

政治の現場としての地方自治体 (354) 地方分権改革 (355) 首長のリーダーシップ (356) 市民参加 (357) 市民のための政治の条件 (358)

**終章** ..... 363

日本型多元主義の終わり (364) 合理的選択と制度設計 (364) 民主主義の危機 (366) 権力にあらがう (367) 世界というテキスト (368)

**あとがき** ..... 371

**索引** ..... 373

事項索引 (373) 人名索引 (382)



## Column 一覧

- 1 フェミニズムと解釈労働 (20)
- 2 官僚の専門性 (53)
- 3 ナショナリズムの種類 (76)
- 4 ファシズムの背景 (102)
- 5 地域の平和と安定 (141)
- 6 寛容コストと抑圧コスト (162)
- 7 行政府と立法府の権力関係の測定 (190)
- 8 福祉国家と脱家族化 (217)
- 9 オピニオン・リーダー (241)
- 10 ソーシャル・キャピタルのメカニズム (261)
- 11 選挙と政権交代 (285)
- 12 一党優位政党制 (320)
- 13 政策起業家とアジェンダ設定 (346)

### /// ウェブサポートページ ///

学習をサポートする資料を提供しています。下記のQRコードからご参照ください。

[https://www.yuhikaku.co.jp/yuhikaku\\_pr/y-knot/list/20008p/](https://www.yuhikaku.co.jp/yuhikaku_pr/y-knot/list/20008p/)



# 序

Chapter  
章

政治学の面白さを知ってもらいたい。

私たちが本書を執筆した動機は、この言葉に尽きます。大学で政治学を教えていると、「政治」に強い関心を持ち、その面白さについて語る受講者に出会う機会は少なくありません。しかし、「政治学」に関しては、これといった印象を持たずに教室を訪れる受講者がほとんどではないでしょうか。そんな受講者たちが、すべての授業を終えた学期の最後に、「政治学への興味が湧いてきました」という感想を伝えてくれること。私たちにとって、それ以上の喜びはありません。とても私的なことになりますが、本書の一番の目的は、この喜びを味わう機会を増やすことにあります。

## 政治学の面白さ

政治学の魅力は、時空を超えて広がる論争のスケールの大きさにあります。

例えば、21世紀の日本の民主主義について考える際に、紀元前4世紀のギリシアで活動していた哲学者アリストテレスの議論が参考になると聞くと、少し驚きませんか。都市国家（ポリス）の時代を生きたアリストテレスは、友愛に支えられた平等な者同士の相互支配こそが良い政治を実現すると考えました（アリストテレス 2001）。広大な領域に無数の人々が暮らす近代国家の時代には、このような議論よりも利害対立を調整する政治制度の設計が重視されてきましたが、その仕組みが行き詰まると、再び古典的な議論への注目が集まります。ここ最近の民主主義国では、政治的な対立が激化した結果、互いを敵同士に見立てて攻撃することが問題になってきました。こうした時代状況の下で、アリストテレスが実はきわめて重要な指摘をしていたということが、改めて確認されたのです。

これは、自然科学ではなかなか見られない光景でしょう。自然科学では、「パラダイム」と呼ばれるような、研究者の間で広く認められた理論や法則が定立されれば、それ以前の議論に遡ることはないので一般的です（クーン 2023）。今日の物理学の授業で、アリストテレスの力学を学ぶことはありません。しかし、政治学の授業では、アリストテレスはもちろん、マキャヴェッリも、ホブズも、当たり前のように登場します。それは、こうした思想家たちが参加していた論争が、いまだに決着を見ていないからです。この終わりのない論争に魅力を感じるとしたら、政治学の面白さを感じる準備が整ったといえるでしょう。

本書を読み進めていくと、そこではカール・マルクスという人物への言及が特に多いことに気づくはずですが、これは他の政治学の教科書とは異なる特徴かもしれません。かつては日本でも、マルクス

の思想が政治学の議論の中で頻繁に登場していました。西洋社会をモデルとする段階的發展論を日本に当てはめるためにその思想が用いられていたのです。それに対する反動として、近年ではマルクスへの言及を避ける傾向が見受けられます。しかし、この教科書ではマルクスを正面から取り上げることにしました。それは、マルクスの思想が正しいと考えるからではなく、それを生み出した西洋社会を理解することが、日本をよりよく知ることにつながると考えたからです。

20世紀以後の日本の政治学は、欧米の政治学の影響を強く受けてきました。その欧米の政治学者たちが常に論敵として念頭に置いていたのが、マルクスです。だからこそ、現代の政治学を理解するうえでは、マルクスのいう階級や革命といった概念の意味を理解することが欠かせません。それを知ること、日本を含む東アジアが、欧米の政治学を生み出した西洋社会とどのように異なるのかが見えてくるでしょう。

このように、政治学の大きな論争の流れをたどりながら、自分の生きる社会について考えることこそが政治学の醍醐味だと、私たちは考えています。

## □▷ 「権力を読み解く」とは？

本書では、権力を読み解くための政治学を学びます。それは、民主主義における主権者として、政治の仕組みに関する基礎知識を身につけることとは違う意味を持ちます。むしろ、近代国家の支配を受ける「被治者」の視点に立って、なぜ今日のような政治の仕組みが形成されたのかを検討します。

これは、誰が「真の権力者」なのかを特定する試みではありません。私たちが暮らす近代国家では、誰が首相になろうと、政権が交代しようとして、人々は国家に税金を納め、国家が提供する行政サービス

スに依存しながら生活しています。つまり、権力者の存在が見えにくくなっていることこそが、近代国家の持つ権力の大きな特徴なのです。そのため本書では、思想、経済、軍事力、制度という4つの権力資源に注目し、それらの組み合わせによって近代国家が形成されたという見方を提示します。

国家権力といわれても、普段の生活の中でそれを感じる場面はそう多くはないでしょう。しかし、実はその感覚こそが、国家権力の大きさを示しています。例えば、テレビアニメ「ドラえもん」を観ながら、「なぜのび太は努力もせずに楽をしようとするのか」という感想を抱いたことはありませんか。「海に入らず海底を散歩する方法」(第1012話)というエピソードで、のび太は、南の島で休暇を楽しむ友だちに嫉妬しつつも、海で泳げるようになるための一切の努力を拒否します。ドラえもんが「どこでもドア」で出かけようと誘っても、のび太は「どうせ海に行ったら泳げないし!」と泣き叫び、海に潜らずに海底を散歩したいなどと言い出すのです。そこでドラえもんは、泳ぐ練習もせず、無茶な要求をしてくるのび太に「水よけロープ」という道具を与え、水に入らずに海の中を楽しめるようにしてあげました。

こういう場面を見て、「頑張らないのび太はずるい」と言いたくなる人もいるでしょう。それでは、その「頑張らないやつは許せない」という感覚は、どこから生まれたのでしょうか。

人類は、ドラえもんの道具を手に入れることはいまだにできていませんが、頑張らなくてもいいようにしてくれる道具ならば、既に数多く生み出してきました。AI(人工知能)の話を持ち出すまでもなく、20世紀前半にコンピュータを発明した人々は、それによって人間の労働時間が激減するだろうと期待していました。1週間に15時間も働けば、それで事足りると考えていたのです。ところが、現実はどうでしょう。1日の仕事を3時間で切り上げる人など、そ

う簡単には見つかりません。しかも、働いている人の多くは、実は自分の仕事は価値のないものなのではないかと内心では思っているようです（グレーバー 2020）。そうだとすれば、なぜ人類は、テクノロジーを駆使して労働時間を減らそうとしないのでしょうか。のび太のように、もっと楽をしながら、豊かな生活を送ることもできるのではないのでしょうか。

実は、この話は国家権力と深く結びついています。人類は、国家の誕生とともに、その活動を支える富を生み出すべく、それまでにない重労働を強いられるようになりました。昔話を読めば、そこでは王や貴族の生活を支えるために、人々が農地を耕し、年貢を納めています。そして、近代国家と呼ばれる今日の国家は、これまでの人類の歴史で類を見ないほど多くの富を生み出す、資本主義という経済システムとともに出現しました。その中で暮らしている私たちは、会社で働いて給料を受け取ることこそが普通の生き方だと考えています。かつての時代よりもはるかに多くの税を集めるようになった国家は、人々の労働時間や働き方にも影響を与えるようになりました。それは、ある特定の権力者が計画したものではなく、さまざまな権力資源が、歴史の中で絡み合いながら、近代国家という組織を生み出したことによって導かれた帰結です。

以上の問題関心にもとづいて、本書では、近代国家が出現した時代から今日に至るまで、政治がどのように展開してきたかを見渡します。

## □▷ 本書の構成

第I部では、政治に関する本書の基本的な考え方について解説します。まず第1章では、政治という活動の性格を理解するための入り口として、暴力について考えます。昔に比べると、今の世の中では暴力が目立たなくなりました。しかし、暴力が減少したように感

じられるのは、それが目に見えない空間で行使されるようになったからにすぎないかもしれません。政治とは、そうした形で暴力を抑制し、隠蔽するような、権力を伴う活動です。この視点から政治を見渡せば、そこでは人々の多様な意見を調停する活動よりも、現状への不満を抑え込む働きが目立ちます。

第2章では、このような権力を行使する組織としての国家が、2つの異なる視点によって理解されてきたことに注目します。一方の視点では、国家は公共の利益を実現する政治共同体です。これに対して、もう一方の視点では、国家は被治者に納税や兵役を強制する暴力機構です。この章では、暴力機構の側面を持つ国家が、それにもかかわらず支配の正統性を獲得し、近代国家へと発展した過程を検討します。

第II部では、今日の世界が、資本主義の下で1つに結ばれるのではなく、一定の領域の上に成り立つ国民国家を基本的な単位とするようになった理由を考えます。ここで重要なのは、それが単一の要因によって導かれた帰結ではないということです。本書では、思想、経済、軍事力、制度という4つの要因がそれぞれどのような役割を果たし、それが互いにどう影響し合ったかに注目します。

第3章では、もともとは国家への帰属意識を持たなかった人々を、国民という集団に結びつけたナショナリズムの思想について検討します。第4章では、グローバルな市場経済が作られる代わりに、国家を単位とする国民経済が重要になった理由を考えます。第5章では、国家という組織が戦争のための軍事力を整備するなかで拡大してきたことを踏まえ、戦争の変容が国家のあり方をどのように変えてきたかを明らかにします。第6章では、国民国家を安定させた制度の働きを考えるべく、官僚制と民主主義を取り上げて検討します。

第III部では、国民国家を前提として創られた民主主義の可能性と

限界について論じます。今日の民主主義国家は、国民という集団が存在することを前提に、その政治制度を作り上げてきました。日本も、このような民主主義国家の中に含まれます。ここでの目的は、それが具体的には何を意味しているのかについて考えることです。

国民という共同体には、対等な人間同士が精神的な絆によって結ばれているというイメージもありますが、そのイメージが実態を反映しているとは限りません。「人民による、人民のための政治」こそが民主主義だといっても、実際に「人民」が直接統治を行っている国は、世界のどこにも存在しないのです。国家権力をどのように行使するかを実際に決めるのは、ごく少数のエリートです。そこで、この第Ⅲ部の各章では、一見すると民主的な政治制度の下で、なぜ少数の人々に権力が集中するのかについて考えていきます。それは同時に、民主国家の下で、なぜ多くの人々の意見が代表されてこなかったのかを考えることにもつながるでしょう。

第7章では、なぜ首相を選挙で選べないのかという疑問から出発し、議院内閣制や大統領制といった政治制度がエリートのどのような利害関心の下に成立したのかを考えます。第8章では、国民国家の領域内に市民としての十分な権利を持たない人々が多数居住していることに注目し、そのような市民権の不平等が生じている理由を考えます。第9章では、なぜメディア企業が政治に関する報道を独占してきたのかを考え、インターネットがその状況にいかなる影響を及ぼすのかを検討します。第10章では利益集団の役割に目を転じ、なぜ特定の団体の代表者だけが政策決定に参加できるのかを考えたいうえで、社会運動の可能性を論じます。第11章では、国民の代表を選んでいるはずの選挙において、いつも同じような人々が当選しているという事実から出発し、候補者たちが選挙を勝ち抜くために用いる手段について考えます。第12章では、有権者の意見を国政に反映するはずの政党が、なぜ少数の幹部の手で運営されて



いるのかを考えます。第13章では、なぜ選挙で選ばれたわけでもない官僚が法律を作っているのかという疑問を踏まえて、それとは異なる道を探ります。

このように、本書ではさまざまなテーマについて議論を行いますが、そこには1つ共通点があります。その共通点とは、政治権力を行使するエリートの視点から一般市民の行動パターンを把握するための政治学ではなく、政治権力を行使される側である一般市民の視点からエリートの動機を理解するための政治学を目指すということです。

この試みは、政治に関する常識を、従来とは異なる視点から捉え直すものでもあります。例えば、西洋社会で作られた理論を東アジアの視点から、男性が提唱した学説を女性の視点から、国民を前提にした議論を外国人の視点から眺めるのが本書のアプローチです。現代における政治の常識を疑い、そのような常識が成立した歴史的な経緯を明らかにする作業を何度も繰り返し行うなかで、本書を手取る皆さんも、権力を読み解くための自分なりの切り口を見つけられるようになることを期待しています。

### /// Bibliography 参考文献 ///

- アリストテレス (2001) 『政治学』 牛田徳子訳、京都大学学術出版会  
グレーバー、デヴィット (2020) 『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』 酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹訳、岩波書店  
クーン、トマス・S (2023) 『科学革命の構造 [新版]』 青木薫訳、みすず書房

【y-knot Musubu】

# 権力を読み解く政治学

*Politics and Power*

2023年12月20日 初版第1刷発行

著者 ナジヒョン まえだけんたろう  
羅芝賢・前田健太郎

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

装丁 高野美緒子

印刷 株式会社精興社

製本 牧製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2023, Jihyun Na and Kentaro Maeda.

Printed in Japan ISBN 978-4-641-20008-1

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

**JCOPY** 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mailinfo@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。